

百羅追善集 『あきのせみ』

——手錢記念館所蔵俳諧資料(三)——

伊藤 善隆
(湘北短期大学)

摘 要

出雲国大社の手錢家に伝来する俳諧資料の中から、広瀬百羅の追善集『あきのせみ』(日々庵浦安編、文化二年蒼虬跋)を翻刻紹介する。同書に収録される「枕言葉」、「蓑笠翁終焉之記」は、大社の俳壇に重要な足跡を残した百羅の伝記資料として重要なものである。また、句を寄せた俳人たちの顔ぶれを見ることで、大社俳人たちの交遊圏を知り得る資料としても貴重である。

キーワード…俳諧、百羅、有秀、大社、手錢記念館

はじめに

『あきのせみ』は広瀬百羅の追善集である。百羅は、大磯義雄氏が、『岡崎日記と研究』(未刊国文学資料刊行会、昭和50年10月)、「高見本『岡崎日記』「元禄式」の出現と去来門人空阿・空阿門人百羅」(『連歌俳諧研究』87、平成6年7月、のち『芭蕉と蕉門俳人』八木書店、平成9年5月、所収)で報告されたとおり、京都で去来の甥の空阿(大磯氏は去来の庶子かと推測されている)から伝授を受け、それを去雲に持ち帰った人物である。

百羅は出雲大社の社家(千家家の代官役)に生まれたが、その母は手錢家の二代目当主である茂助長定の娘であった。また、『あきのせみ』に「門人」として序文(「枕言葉」)を寄せ、百羅の肖像画を描いている衝冠斎有秀は、手錢家の五代目当主官三郎有秀である。有秀は百羅の息である日々庵浦安とも大変親しかった。本書が手錢家に伝来したのは、そうした両家の深い関係があつたことである。

一 書誌

書型……半紙本一冊。袋綴じ。楮紙。

表紙……原表紙。香色地に菊牡丹唐草文様を空押し。

縦二二・五cm×横一五・九cm。

題簽……原題簽。中央無辺。「あきのせみ 完」。

序文……序題「枕言葉」、序文署名「門人／衝冠齋有秀書」。

版式……無辺無界每半葉八行(「枕言葉」・「蓑笠翁終焉之記」)、

無辺無界每半葉七行内外(本文・蒼虬跋)。

字高……一七・六cm(序文「画て西施をく刻て」を計測)。

跋文……署名「文化乙丑初冬 蒼虬跋」。

刊記……「京都書林 烏丸下立売上 橘榮堂 勝田善助」。

丁数……全二七丁。

二 広瀬百羅について

はじめに記したように、百羅は去来・空阿の伝授を出雲に持ち帰った重要な俳人である。その人物や伝授について、詳しくは桑原視草氏『出雲俳句史』(私家版、昭和12年9月・だるま堂限定版、昭和53年4月)、同氏『出雲俳壇の人々』(だるま堂書店、昭和56年8月)と前掲大磯氏著書に譲るが、ここでは『あきのせみ』の記述に関わる百羅の伝記的事項について、簡単に触れておきたい。

百羅が京都に遊学して伝授を受けたのは宝暦八年七月から十月のことである。『あきのせみ』の「枕言葉」に「はじめ都に十とせばかりの春秋をおくり、夏草のしげきを分て千代の古道の跡をもとめ」と言い、同じく「蓑笠翁終焉之記」に「若冠の頃より和学に志し、官袴を辞して都にのぼり、千代の古道の跡をしたひ、東南西北に吟会し、古翁の風骨をも探りて月花に遊ぶ」とあるのは、空阿の名前こそ明らかに出

さないものの、その京都遊学を言ったものであろう。

椎の本花叔は、その著『雲陽人物誌』(文政六年)に、つぎのように百羅の伝を載せている。なお、花叔は『あきのせみ』に句を寄せてもいる。

○春信 氏は広瀬、通称土佐助、杵築之人也。神学ニ名高し。和哥誹諧を好む。始常悦の門人、後芝山持豊卿の門弟となる。号百羅。蓑笠翁、鳳尾齋、七俵齋、重隠子等數号あり。実名を、始春光又貞悦ともいひし。又蓮心長隱などの号も有しと也。

著述 誹諧二十五條 同執中抄 千代の古道 和学精微抄
手尔於葉抄

其外撰書多し。享和二戌七月廿四日齡算七十一ニテ卒す。

附録 国造家より侍講たらしめんと有ければ、録を家弟に譲りて京都に遊び、年を経て古郷に帰り、市中に隠る。又富士を見んとてはる／＼東に杖を曳いて

日のもとの名におふ山かあめつちのなかにひとつのふしの高根ハ

辞世

時来り何れか先に秋の蟬

(山崎真克氏¹⁾『椎の本花叔編『雲陽人物誌』翻刻』による)

引用中には、百羅が「杵築之人」であること、また「録を家弟に譲りて京都に遊び、年を経て古郷に帰り、市中に隠」れたことが記されている。家族のことと、上京、閑居については、他の資料も簡単にだが参照しておきたい。

広瀬嘉内信睦の嫡男として出雲国簸川郡杵築町に生まれ幼少にして穎悟好学、京都に出でて神学及和漢の学を修め帰国して家職についたが後多病の為に家督を弟に譲って市中宇越峠に閑居した。

〔出雲俳句史〕

父は信睦 母者手銭茂助女 春信翁若冠より学事を好み弟巨人正昌に家を譲りて上京し 明経の御博士舟橋の御殿に入門して和漢の書籍を拝伝し 和歌を学び俳諧に達す 妻は在京の砌り約したる中野利兵衛女也 元来是は舟橋二位則賢郷の妾腹也 中野氏養育して後 近衛殿の政所に致仕ありしを舟橋殿の御奥豊真院の御方媒介ありて妻に娶り 帰国して市中に閑居して一男子を儲け 鳳尾齊百羅と号して専ら風雅を好みて四方に名高し

〔出雲俳壇の人々〕所引、「北広家の家系帳」

家督を弟に譲った理由や時期については、文献により多少の違いがあるが、出雲に戻ったからの閑居については、どの文献も共通して伝える。『あきのせみ』所収の「養翁終焉之記」にも「翁は常に名利を好まず」「書店に鬻ぎ、好士をまねきて活計のたよりとすることをなさず」「諸国の風客問へども答へず」とその人となりを記している。

桑原氏『出雲俳句史』には、百羅の俳諧について、「二十七八才の頃より志し」「当時天下に名高い俳士との交遊が深く又各流派の俳風を学んだらしく」「研鑽につとめたが結局宗とすべきは芭蕉の外に一人もないとてこれを師と仰いだ」とある。百羅の生年を享保十六年とすれば、二十七八才の頃とは、ちょうど空阿から伝授を受けた宝暦八年頃である。

京都で空阿の伝授を受けた結果、百羅は、芭蕉四世、落柿舎三世を名乗るようになる。出雲に戻ったからの百羅の隠逸的な生き方は、百羅のもととの気質によるとともに、去来・空阿の伝授を抛り所として、当時流行していた美濃派の俳人たちとは、一線を画した俳諧活動を行っていたことを示すものとも考えられよう。

三 百羅の没年について

なお、百羅の生没年については、これまでも疑問が呈されていた。

追善集である『あきのせみ』を参照しても、残念ながらその疑問を解決するには至らない。すなわち、桑原氏は『出雲俳壇の人々』で、

大社町教育委員会編の「広瀬百羅顕彰記念誌」に彼の生年を享保十六年とし歿年を享和三年とし、七十二歳歿としてゐる。又、「雲陽人物誌」は七十一歳卒としてをり、拙著「出雲俳句史」には七十一才と記した。これはその頃彼の生年がわからぬため、同時代の花叔の記を採った。然し、大社町教委編の「百羅関係俳諧年譜」によると、彼は享保十六年に生誕し、享和三年に七十二才で歿したとしている。然し年表を繰ってみると七十三才歿になる。今、右の生年と享年の年が正しいとすれば、七十三才歿を正しいとせねばなるまい。これも後証にまたねばならない。

と指摘する。たしかに、桑原氏が同書で引用する『雲陽人物誌』には「享和三の七月廿四日齡算七十一にて卒ス」とある由。また、やはり同書に引用する北広家の家系帳にも「享和癸亥七月廿四日 七十一才卒す」とある由である。

しかし、前引の山崎氏翻刻の『雲陽人物誌』（底本は島根県立図書館蔵本）を参照すると「享和二戊七月廿四日齡算七十一ニテ卒す」とあって、享和三年とは一年の違いがある。

また、『あきのせみ』を参照すると、「枕言葉」に「古翁は元禄七年の迂化、師は享保十年の生れなれば、年暦四十四年を隔つ」とあるが、元禄七年から四十四年後は元文三年になる。享保十年は三十一年後で

あるから、この記述は俄に信用することができない。また、「蓑笠翁終焉之記」には「ことし七十一歳」とあるのだが、「ことし」とあるばかりで、享和二年のことか、三年のことかが明確でない。したがって、生没年については、『あきのせみ』を参照しても、いま一つ明確にはならないのである。

おわりに

桑原氏の『出雲俳壇の人々』には、『あきのせみ』に載る百羅の辞世句と浦安の脇句が紹介されている。しかし、その出典は『あきのせみ』ではなく、「嗣子日々華浦安草稿、百羅「追善句募集文」であるという。現在、その「追善句募集文」を確認することはできないが、おそらくは、その「募集文」によって集められた句が、この『あきのせみ』に収録されたのであろう。

繰り返しになるが、『あきのせみ』は、百羅の伝記資料としても、大社俳人たちやその交遊圏を具体的に知り得る資料としても貴重である。ここに翻刻紹介する所以である。

注

(1) 私家版(平成25年9月発行)による。なお、引用にあたり、適宜改行を改め、句読点を補った。

〈凡例〉

翻刻にあたっては、概ね通行の字体を用いた。

句読点、濁点は適宜補い、改行も適宜改めた。ただし、2丁裏の「国

造のみたち」の前で改行するのは、原本どおりである。

原本の各丁片面の終わりに当たるところに「をつけ、()内にその丁数および表・裏(オ・ウ)を示した。

誤記かと思われる箇所も原文どおりに翻刻し、適宜その傍に「(ママ)」を付した。

参考のため、原本の参考図版を末尾に示した。

〈翻刻〉

枕言葉

画で西施をなす。美なれども悦ぶべからず。刻て桃李をなす。似たれども食ふべからず。されば、道の正異を勘弁して邪路に踏まよはざるを誠の明師とは仰くべきなり。粵に鳳尾齋先生は若かりしより風雅に富るものから、西は松浦がた、東は清見瀉をも遠しとせず、芳野、初瀬の花に笑ひ、須磨、更科の月をかなしみ、古翁の「(1オ) 風流を慕ひて、正風の骨髓を探られけるは、みそぢあまりのむかしにん。はじめ都に十とせばかりの春秋をおくり、夏草のしげきを分て千代の古道の跡をもとめ、其後門人のまねきによりて芸備のかたにも行かひつ、西南の漫遊もつきたればと、ふた、びすがのふるさとに帰らるゝに、門葉日々にまし、月々にさかへて、句をこひ評をねがひて遠近の好士むれ来るより、閑居一日もしづか(1ウ)ならず。さるをまた、東海道の一筋を見ざらむはと古翁のこと葉もわすれがたく、かつはあめつちのうちになぐひなしてふ富士を見ずしてしなんことも口おして、天明はじめの夏、六十になんくとして、あづまの旅に思ひたてるを、と、むる人のなきにしもあらねど、よしや旅の世にたび寐してと慈鎮和尚の感慨も、いづくの土か我を待らんと西行法師の歎息も、此人々

には限るべからずとて、時しらぬ」(2才) 雪見にゆかれけるが、今は長途のつかれもやすからずと、閑窓にかいこもり、老を養ふつれなくには、いにしへ今のふみを耕し、みづから簑笠の翁とあらため、しのびかくれて、しづかならんとすれども、公子のもとめ、もだしがたくや、終に

国造のみたちにまうで、古道をとかる、に、からのやまとの隈々まで掌を見るがごとく、一事滞ることなきを、ふかくほめさせ給ひつ、時習館を」(2ウ) たまはり、長く君の師範ともなし給ふに、ことしきさらざはじめより、翁の心地例ならず、文月末の四日、黄泉に杖をひかる。やから、はらから、門弟すら遠近よりつどひ来りて、野辺の送りにぎくしく、踊躍築理こと終れば、西の蓮の寺にいこもりて、手向の文台を催しけるに、終に七日に及びぬれば、令子浦安、集書して是を神光道場に納るとて、其おもむきをしるせよとあるに、いなみがたくて」(3才) 筆をとる。抑、師が誹諧は、いにしへ十哲の意気によらず、古翁の正風を見ひらき給ひし古今集のひなぶりにして、神道をもて父となし、歌道をもて母となせし、日の本の本理正道なり。古翁は元禄七年の迁化、師は享保十年の生れなれば年暦四十四年を隔つといへども、詞のはしに風骨を探りて、辛崎、古池の妙所を悟られけるは、我道の中興にして、尤信すべき先達也。孝子、其」(3ウ) 志をつぎて、ともに正風の絶せぬこそ、古翁の本意にも叶ふならめ。師、常にいひけらく、我若かりしより風雅に遊び、詩歌連誹にわたりて其大むねを考ふるに、詩はから国の風雅なれば論ずるに及ばず。和歌連歌は高貴のもて遊びにして、宮歌ともみやぶりともしへるにや。されば、是をもて遊ぶは其恐れ少なからねば、誹諧をもて教誡のはしとすべしと。かの古今集に体品を分ちて、是をひな歌ともひな」(4才) ぶりと

もいへり。古翁は爰に眼をひらきて、正風の奥義をきはめらる。我徒、もし風雅に遊ぶとも、必しもみやうたのことをいふべからず。唯、ひな歌をもて遊ぶべし。歌連誹、其名異なれども、もとはひとつのやまとうたにして、ともに皇国の教誡也。たましく世間の誹風を見るに、あるは和哥に歎し、あるは連哥をそするの意気あり。古翁の本意にあらざれば、かりそめにも」(4ウ) 和哥連哥を疎隔するものは、正風の人とはいふべからずと、且夕にしめされたり。同門の輩、長く風徳をわすれまじきため、筆のつみでにかくはしるし置ものならし。

門人

衝冠齋有秀書

〔印〕印

〔5才〕

(白紙)

〔5ウ〕

蓑笠翁終焉之記

千里の道も一歩よりはじまり、万仞の山も塵芥よりなれるとかや。なるとならざるは、げに怠るとつとむるとにあり。我師、みの笠の翁は、若冠の頃より和学に志し、官袴を辞して都にのほり、千代の古道の跡をしたひ、東南西北に吟会し、古翁の風骨をも探りて」(6才) 月花に遊ぶこと、既に五十年なり。いづれのとしにかありけむ、雲の上人の仰ごとありて、和哥の主宰となし給ひけれども、翁は常に名利を好まず。唯そのひとりをつ、しみて明暮故実を糾明し、筆記せるもの数百巻に及べり。されども、是を書店に鬻ぎ、好士をまねきて活計のたよりとすることをなさず。故に、諸国の風客問へども答へず。」(6ウ) ふかく蓬戸を閉て、徳光をつ、むといへども、爰にあればかしこに聞えて、風流をしたふもの、指を折に限りなし。さるを、鶉月はじめより、飲食心にまかせず。良医手をつくすといへども、更にそのしるしなく、

夏もなかばを過る頃より、酷暑のなやみ少からねば、門人厚志の輩、夜に日につどひて力をそふるに、。起直る身の「(7オ)むつかしや雨の萩、。床つめに啼音くらべむきりくす、などありしは、過し十一の夜の吟なり。廿三日、病床を伺ひよるに、かねてやしなひのよければにや、ことし七十一歳にして顔色うるはしく、心すくやかなりしも、さすがにより来る老の波に、今はたのみすくなく見え侍れば、孝子浦安をはじめ、をのく、仏神の冥助を「(7ウ)祈るのみ。翁、目を見ひらきて、。時来りいつれか先に秋の蟬、と高吟し給ふ。令子、筆をとりあへず、。月をまつ間のかぜのうき雲、とありければ、翁、莞爾とうちゑみ給ひぬ。是、生涯の笑ひ納めなりとをもしらず、をのく、観喜のおもひをなしつるに、廿四日、亭午の頃より、燈のきゆるがごとく、いと静にみまかり給ふ。一座の「(8オ)嘆息いふばかりなし。扱しもあるべきことならねば、手にくくしまつるべき用意ぞなしにける。なをよみの山路のつとにとて、をのく、離別の思ひをのばへ、ともにひつぎのうち納め、神光禪寺の松山をひらき、葬儀奠香の式などいとなみしは、文月二五日のことなりき。徳行を賞するは翁の心にあらざれば、かれこれを「(8ウ)書もらしつ。唯、風のたよりに、はせあつまる人々の志しの至れるを感じるのあまり、おろかなる筆を染て、霊前に手向奉るも、みな夢の世の夢なりけらし。

門人

松茂亭露磨敬書

〔印〕〔印〕

〔(9オ)〕

有秀敬画

(肖像画) ※末尾の参考図版6を参照)

六月十二日、病床のまくらに此蝶ひとつ来りてとまれり。見るうちに横にこけたり。とりて見るに、すこしもうごかず。我をむかひに來りけるにやとおもひて

百羅

世を秋もまたでや夢のさめつらん

〔(9ウ)〕

時習館老人は、和漢のふみに眼をさらし、日本魂のますらおなるが、ことし秋七月黄泉の客となれり。嗚呼おしむべし、かなしむべし

花の夢のさめてはかなし月の蝶

潜龍

月花にむかへばおもふむかし哉

白玉

草に木におしむ光りを風の露

女繁子

皆人の思ひやふかき秋の暮

女昉里

森連

捨られし老の友なり露の蝶

達支

啼音をば人に残して秋の蟬

烏鶺

目にあまる泪や塚の草の露

嘉楽

踏分し露ふる道や文見月

佳涼

人のみかなかぬ虫なし草の原

一壺

消残ること葉の花や露の玉

思友

招けどもかへらぬ空やあけの月

竜玉

雲井まで名を上てゆく螢かな

こと

山彦の歎く泪歎楨の露

亀山

怠りは身のうらみ也葛の花

波光

塚に來て啼は床しや夜の鹿

竹芽

〔(10ウ)〕

〔(10オ)〕

春秋や今ぞ身に知る風の音

亀上

〔11オ〕

鹿は居ずあだにをれふす露の萩

壺外

歎けとて月日は来ねど玉祭

洗耳

秋水や袖からもちる萩の露

梅風

夢なれや別れし秋も一むかし

喜遊

おしめどももろき命や露の蝶

遊枝

啼ぬものはなかで哀れや秋の蝶

鳥鼠

西連

〔11ウ〕

秋の蟬の一句をつらねて、世を去たまひし一周忌に

秋の蟬声のしぐれも一めぐり

巴水

何事を塚に来てなく秋の蟬

文水

西にゆく道やあかるき月の旅

有風

人なくて守ながら身も案山子哉

巴友

身は露ときへても玉の光り哉

巴石

朝貌や身を知る露は袖にちる

呂竹

啼虫の泪の雨となりにけり

雀子

中連

〔12オ〕

尊師みまかりたまひ、今も面影のたちさらぬを

いますかと仰げば空に月ひとり

琴左

吹風や行衛を見する萩の露

呉竹

在し世の佛ゆかし袖の月

みな

影かなし月はいつもの雲間より

巴柳

淋しさを跡に残して一葉かな

山虎

世にたぐひなき名残すや秋の蝶

音志

立連

〔12ウ〕

翁の塚に詣て

石にまで光り残して露の玉

雪桃庵

今も物を問はゞ答へよ石の露

梅子

落てなを目にたつ桐の一葉哉

寸苗

涕は月こそさそへ秋の空

扇風

うきことは夢にもならず秋の蝶

芦川

龍と化して雲は去けり秋の風

有秀

月花の夢は残して秋の蝶

露丸

南連

百羅先生みまかり給ひしをいたみて

〔13ウ〕

月清き空も手向の露時雨

しけ

焼香や庭にも蘭の芳ばしき

鷺橋

日ぐらしや汝も泪にむせぶかと

依水

行道の俄につらし雲の月

扶月

知宮連

一衣をもちゆるごとに紡績の灯びを思ひ、一食を用ゆる毎に稼稷

の功を按ずと。まして師の恩、父母のいさをしをや。〔14オ〕百羅

先生みまかりたまひ、孝子宇羅安のもとに申送る

蓑虫と共に啼なりきりぐす

黎光室 里蝶

手を突て虫の音をさく石の上

凌雲

残る蚊のすよる所よ塚の奥

一釣

風に遊びし身も風にちる柳かな

飛鳩

常香に日あし尋ねつ霧の朝

竜池

染くちるはつれなき紅葉哉

波濤

鴉さへ秋はかなしく啼に鳧

魚村

〔14ウ〕

きのふよりけふは鬱とし秋の雨
月影を汲て手向ん閑伽の水

燕子
文節

六斎や鐘きく毎に嘸念仏
久村連

春翠
〔16ウ〕

名を知らぬ花にも泣や草の原

信風

きりぐす我は花野も血の涙

東廬

行秋に名はとゞめけり塚の花

吾友

秋風の吹ちらしたるほたるかな

澄水

魂棚は月と花とになりて

花叔

神西連

かなしみは行も残るも秋の旅

不尺

はらぐと木末も露の時雨かな

三都良

燈籠もきえてかなしく益くれぬ

玉佐

かへり来ぬ人の行衛や秋の風

百丈

白雲の行衛やいづこ秋の風

柳枝

蘭の香は世に残れども秋の風

里石

燈籠のきえて心のくらさかな

一勇

篠連

はかなさや夢のうき世に秋の蝶

舞扇

皆人の袖の涙や露時雨

風便

蓑虫の啼夜いやます泪かな

梅亭

大津連

蓑笠の俯ゆかし雨の月

一字

見し人のかたみや月の影かなし

芦條

平田連

こぼれても露のいさをや野の錦

冠志

虫のねや我も泪にしのみかね

紫翠

小田連

身ひとつに吹かとはかり秋の風

其泉

三刀屋連

そも此叟、和歌は芝山卿にまなび、俳諧は去来、文章(マツ)か腸を探り、

ともに上手の誉ありて、世に百羅先生〔17オ〕ともてはやしたり

けるが、ことし文月末の四日、黄泉の風さそひ来りて、五十田狭

の小汀に月を見すて給ふぞいとかなし。

行くて戻らぬ旅や月の秋

東明

萩の声萩はうつぶく夕かな

維中

盆の後又なきたまを祭り覺

龜六

桂男の影やはかなし袖の露

喜朝

松江連

池水や蓮の実飛て秋淋し

野艾

虫なくや露もまたひぬ苔の下

文字

なき友の名もなつかしき盆会かな

得志

鳳尾斎主人は、間もなき月を見残し、黄泉へ杖をひかれしとなん

聞へけるにぞ、いさ、か桎章をのばへ悼侍らん〔18オ〕と思ふの

折ふし、三五夜雨あり

春宵庵 文竜

さればこそふるは泪歎月今宵

高名なる百羅主人、此ほどみまかり給ふとぞ。終に謁せざる事の

ほぬなき、思ひつゞくるもむなし

富水

蓑笠翁の世にましたうちは、終にまみえざれば、此事の、のこり
多くて、「(18ウ) 今さら懐旧の泪に筆をそめて、霊前に備ふるのみ
文月や何思ふてもかた便り

石見連

鳳尾庵宗匠みまかり給ふとき、いほりへ訪らふ日は九月九日の

宴なれば

なき跡もかほるや菊の花にけふ

さればこそ此日は空も秋の雨

瓶左

「(19オ)

其花

兄なる春信翁の小祥の忌日に、生るがごとく画像をかけ奉りて

十圍

兄君の別れをおしみて

女智竜院

是も又夢になれかし秋の蝶

秋さむも知らせ給はぬ寐顔かな

月をさぞ蓮の花のうてなより

月淋しめでこし人は雲がくれ

たのみたる露もはかなし秋の蝶

月花の涙のたねや塚の露

手にうけて見ればなつかし草の露

大父君の塚にまいりて

朝貌や手向の露に咲残り

会者定離のならひも、今老のもの忘れして

露時雨涙も袖にたまちかぬ

舅君のわかれをかなしむ

朝ざりははれても袖のしめり哉

親にくる、は子たるもの、つねなれども、きのふをけふとは思

はずして、「(20ウ) あすか川あすもありと、昔の根のながきとし月、
いたづらに過來しつる忘りの涙あふれ出て、今はた袖をしぼるも、
なをおろかなること、ろならんかし

味業斎 浦安

なき跡にたつや心の霧の海

右

不老山神光寺額面

諸国勸進二千余吟之内拔萃

洛陽 芭蕉堂蒼虬撰

名月や雨吹こぼす萩すゝき

木がらしやいろく市の立しあと

日のいりもどこやらゆかし年の山

そのあたり水も枯たる柳かな

寒月やふるき尾花の影法師

水白く見えつ、秋のゆく多かな

ひる顔のかたぶいて咲くもりかな

鶏のかき交て見る落葉かな

露涼し月のはなれぬ草の上

大様に一葉ちりけり雨の後

啼止て飛虫もあり朝の月

小男鹿や啼つくしては立つくし

海原の月啼けしてちどりかな

野の末や日の入さむく啼からす

あさよさや秋をなくさむ鐘のこゑ

はつ秋や障子一枚たて、あり

啼鳥にさして名もなし帰り花

「(21オ)

伊豫松山 箒主

伯州大袋 安水

雲州稗原 余野

土佐宇賀 花山

雲州松江 文龍

備中酒津 尺梅

同 露之

伯州ミサキ 流水

同 湖水

石州川下 志水

同 四橋

雲州松江 可厚

土佐三津浜 可復

石州川下 胡文

伊豫松山 逸志

同 琴風

石州吉永 一物

作州自然庵

「(22オ)

白蓮や水重くと朝ぐもり

作州津山 龜栖

〔22ウ〕

赤椿ちるや庵のかたあかり

伯州ミサキ 宜哉

花のいめちる時なれや明のかね

作州久常 蛙鏡

花くといひつ、六日過しけり

伊豫松山 一翠

ふる道の心おほえや山ざくら

石州川下 松花

鴨啼や汐にしめりし関の幕

伯州ミサキ 花来

松すぎて杉に物うしかんこ鳥

伯州寺内 新風

秋の蟬くる、を啼てあはれ也

伯州天方 其梁

すてられた犬の子なくやおぼる月

石州河本 暁慮

咲残る白菊さむき月夜かな

土佐中村 北川

行春のかげうつりけり飛鳥川

備中法蓮 簾雨

紫陽花の春はきのふと成にけり

同 蔦橋

我笠のげにはぬれけり初しぐれ

同 芳蓑

きり一葉落て秋しる夕部かな

雲州古志原 玉水

のぼる日にきてあとなし塚の雪

同 志功

玉と見し露の行衛や神がくれ

作州吉野 鵲巢

起出て西に月見るひとりかな

京百仏庵 古岩

おしそふに鐘つくはるの夕部かな

石州吉永 龍溪

霧ふかし夜明けて虫の啼やまず

伯州ミサキ 碩遊

ぬれ鴉飛やいづこの初時雨

紀州若山 春曉

二日月鷹一声に入にけり

伯州山根 哥遊

歌よんで石に書けり秋の山

雲州忌部 里石

白雨の残り岩根や苔霏

同 荷水

戸の内も芒にぬる、伏家哉

伊豫字一 五粒

武蔵野や卯の花すぎき夏月

石州 琴後

〔24オ〕

月花は見あきて老の雪見哉

石州吉永 里雪

あたらしき石碑も見へて盆の月

石州川下 玉川

是にたる言の葉はなし今日の月

石州延里 里明

酒やめて何やら淋し花の山

雲州忌部 一枝

ちどり啼てもれ来る風の音あはれ

土佐中村 文律

いたづらににしきの野とはなりに覺

紀州日高 五風

かり跡に瘦てか、しの動かな

土佐中村 廬竹

塩木焚て臍あふる夜や啼千鳥

土佐上岡 古楯

寒梅やむかしはだれかすみ所

同 甲原 藤枝

菜の花や野は金色の別世界

同 西野 梅語

伽羅の火のきえて菖蒲のほひかな

雲州忌部 和水

行秋を棚に見て居る瓢かな

石州土江 芦江

風の夜や庭の落葉も雨の音

同 柳水

ふらぬ日も雨をふくみし芭蕉かな

伯州ミサキ 仲麟

以上特載俳諧之発句。猶雖有悼詩和歌連哥等、不能及具記書。

〔25ウ〕

鳳尾齋百羅のぬしは、出雲八重垣のおくまでたどりえ、さくり

えたる翁なりとて、其ほとりにてはいみじき名をとりたる人のごとし。

文月の末かの〔26オ〕 国のよもつひら坂におもむかれたるを、その門

人たち、なげきにたえず、これのとぶらひ草をものし、みやこにのほ

しておのれにひとことくはへてよと乞ふ。おのれもかねてよりき、し

り、したひおほえたりし〔26ウ〕 おきななれば、ともに涙の一雫をそ

えて、手向のしりへにおくといふ。

文化乙丑初冬 蒼虬跋

〔27オ〕

京都書林 烏丸下立売上 橘榮堂 勝田善助 「(27ウ・終)

〈付記〉

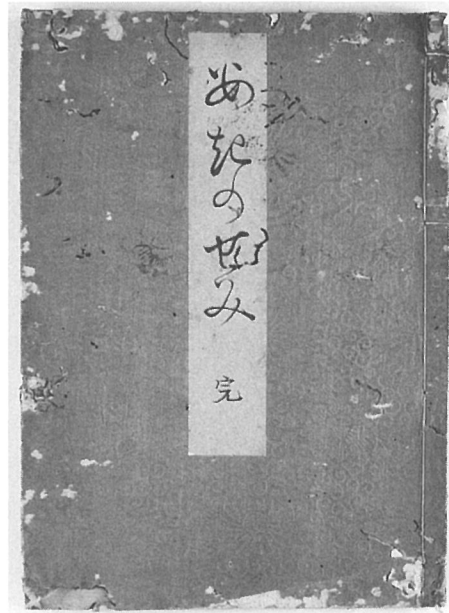
本稿をなすにあたり、手銭家の皆様には特段のお世話に預かりました。また、手銭記念館の佐々木杏里様には、細部にわたり懇切なご教示を賜りました。記して感謝申し上げます。

本稿は、山陰研究プロジェクト「山陰地域文学関係資料の公開に関するプロジェクト」(二〇一三～二〇一五年度、代表・野本瑠美)、国文学研究資料館基幹研究「近世における蔵書形成と文芸享受」(代表・大高洋司)の研究成果の一部である。

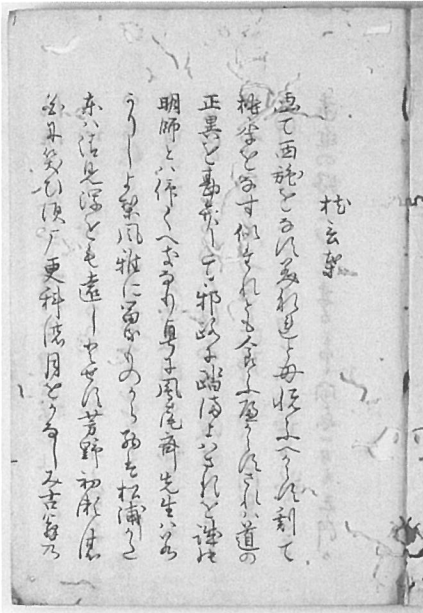
なお、本稿は、拙稿「季硯句集『松葉日記』—手銭記念館所蔵俳諧資料(一)—」(『山陰研究』第六号、二〇一三年十二月)、同「翻刻・手銭記念館所蔵俳諧伝書(一)—手銭記念館所蔵俳諧資料(二)—」(『湘北紀要』三五号、二〇一四年三月)に続く研究成果である。

〈参考図版〉

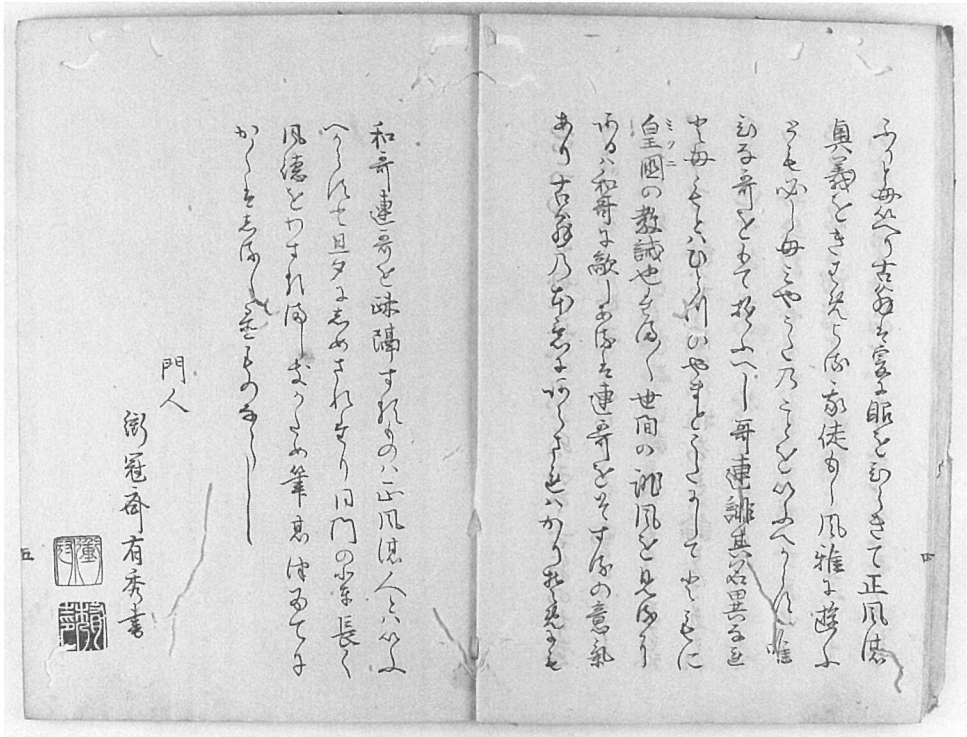
1. 表紙



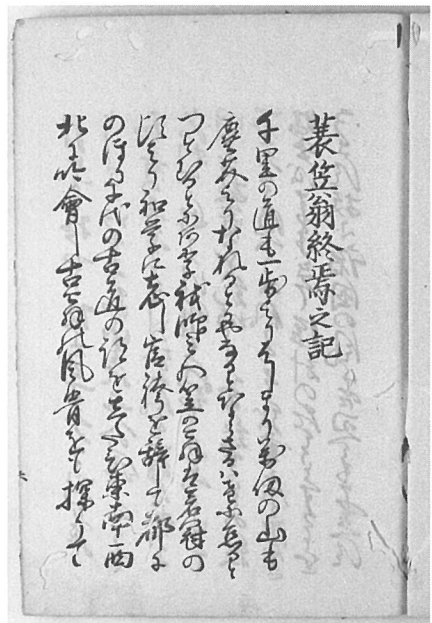
2. 「枕言葉」巻頭(1才)



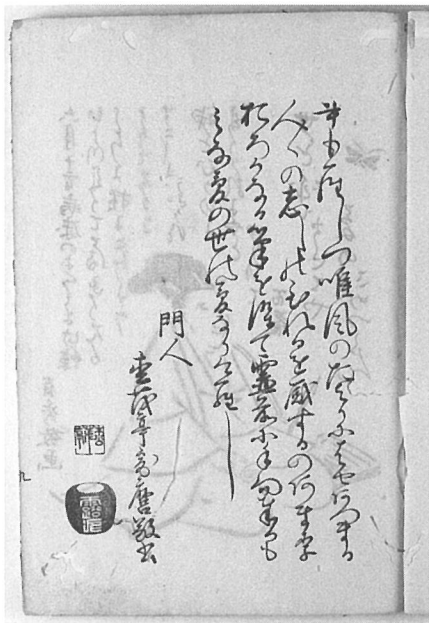
3. 「枕言葉」末尾(4ウ・5オ)



4. 「蓑笠翁終焉之記」冒頭(6オ)



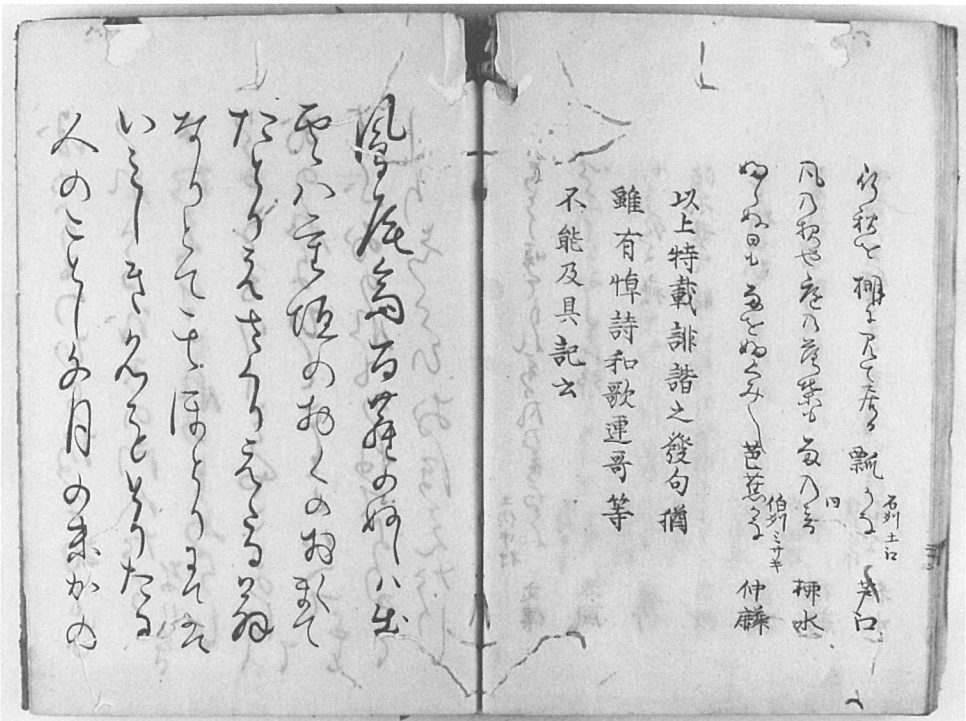
5. 「蓑笠翁終焉之記」末尾(9オ)



6. 百羅肖像 (9ウ)・本文卷頭 (10オ)

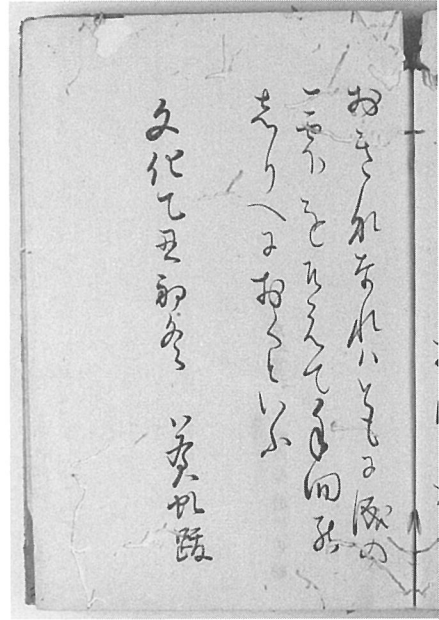


7. 本文卷末 (25ウ)・跋文冒頭 (26オ)

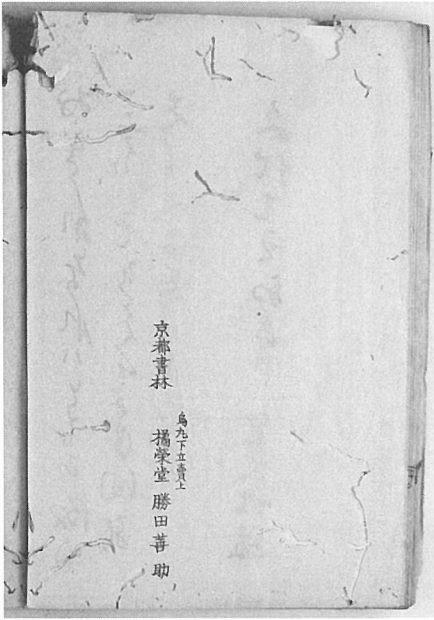


百羅追善集「あきのせみ」——手錢記念館所蔵俳諧資料(三)——(伊藤善隆)

8. 跋文末尾(27才)



9. 刊記(27ウ)



The memorial collection tribute to Byakura “Akinosemi”: reprint and introduction

—A study of Haikai literature in Tezen Family Archives (3)—

ITO Yoshitaka

(Shohoku College Department of Business Administration and Communication)

[Abstract]

“Akinosemi” owned by Tezen Museum is a memorial collection tribute to Byakura. Byakura was one of the most important haikai poets in Taisha area. In Taisha, haikai poets had inherited the teaching of Kyorai, which was introduced by Byakura.

Keywords : Haikai, Byakura, Arihide, Taisya, Tezen Museum